

残念なITシステムをなくすために

訳者代表 わしざき ひろのり 鷺崎 弘宜

(早稲田大学グローバルソフトウェアエンジニアリング研究所所長)

官民を問わず、何らかの目標達成のためにITシステムの導入といった戦略をたてることが多いが、多額の投資に見合う効果が得られることは稀である。本書はそのような現状を打破することを目的とし、測定を通じて目標を定量管理するなかで、組織のあらゆる箇所や階層において目標と戦略を整合させ、改善させ続ける手法“GQM+Strategies”（「目標・質問・メトリクス+戦略」手法）を、豊富な実践事例を用いてわかりやすく解説した。経営者や投資（特にIT投資）を検討する立場の方から、戦略（特にITシステム）の企画立案や運用に携わる方まで、幅広く役立つものとなっている。

また、目標指向の測定手法である Goal-Question-Metric 法（「目標・質問・メトリクス」法：GQM 法）の解説書としても有用である。GQM+Strategies は、GQM 法を組織目標や戦略の整合性確保に向けて拡張した手法として位置付けられる。

GQM+Strategies を日本に紹介したいと思った理由、それは、正しく機能するけれども役に立たない「残念なITシステム」が日本中にあふれていると感じるからである。GQM+Strategies は、以下の三つの特徴を全て、無理なく、組織的に、一貫した形で進められるようにまとめあげることで、残念なITシステムを作らせない。

第一に、目標を明確にすると同時に、目標達成のために立案した戦略が有効であることの根拠を明確にし、絶えず見直し続ける。根拠には仮定している事柄と、確かな事実の両方があり、これらを明確に区別しておくことでリスクの識別や見直しが容易となる。

第二に、組織の構造に沿って上位から下位まで、整合性をもって途切れなく、目標と戦略を連鎖させる。こうすることで、組織のあらゆる箇所や階層において、戦略が上位の目標に効果し、さらには最上位の経営目標に至るまで貢献していることを皆で確認できる。

第三に、組織のあらゆる箇所や階層において、掲げた目標を定量管理できるように、必ず測定に基づく評価尺度を定めておくことである。



Victor Basili・Adam Trendowicz・Martin Kowalczyk・Jens Heidrich・Carolyn Seaman・Jürgen Münch・Dieter Rombach 共著
鷺崎弘宜・小堀貴信・新谷勝利・松岡秀樹 監訳
早稲田大学グローバルソフトウェアエンジニアリング研究所ゴール指向経営研究会 訳
A5判 / 244頁 / 本体 2800円 + 税

ドイツ・フラウンホーファー研究機構 IESE の主導で開発された GQM+Strategies は、日本を含む世界中の企業・組織で広く活用され、経営戦略の策定や受発注者間の目標の整合性確保、組織的な戦略検討と目標管理に効果を発揮している。その実践事例として、情報処理推進機構 (IPA) や宇宙航空研究開発機構 (JAXA)、国際的石油ガス企業エコペトロール社など、様々な事例を紹介している。

残念なITシステムをどうすればなくせるかという悩みを抱えていたときに GQM+Strategies に出会い、そのいかにもドイツらしい、シンプルで無駄のない合理的な枠組みに魅了された。以降、IPA/SEC において IESE と共同研究を行い、さらに最近では早稲田大学においてゴール指向経営研究会を設立し実践や拡張研究を行っている。本書をぜひ手に取って、的を射たITシステムの開発や導入、目標と戦略の立案と実施管理、組織的改善に役立ててほしい。